

未知なる領域の歩き方



これから研究という探求を始めるあなたへ

研究の種は、身近な「悔しさ」から生まれる



- 「歴史は単なる暗記教科だ」と言われることへの強い抵抗感。
- 年号や人物名、戦いの名前を強いるだけの授業に対する疑問。
- この純粋な「悔しさ」と「変えたい」という思いが、私の研究の出発点でした。

偉大な研究も、最初は個人的な「フラストレーション」から始まります。

過去の記録から、未来の課題解決へ

歴史を学ぶ本当の理由は「過去を知って、未来に生かす」こと。
それを実現するための新しい授業を自ら創り出すことが、私の研究の目的となりました。



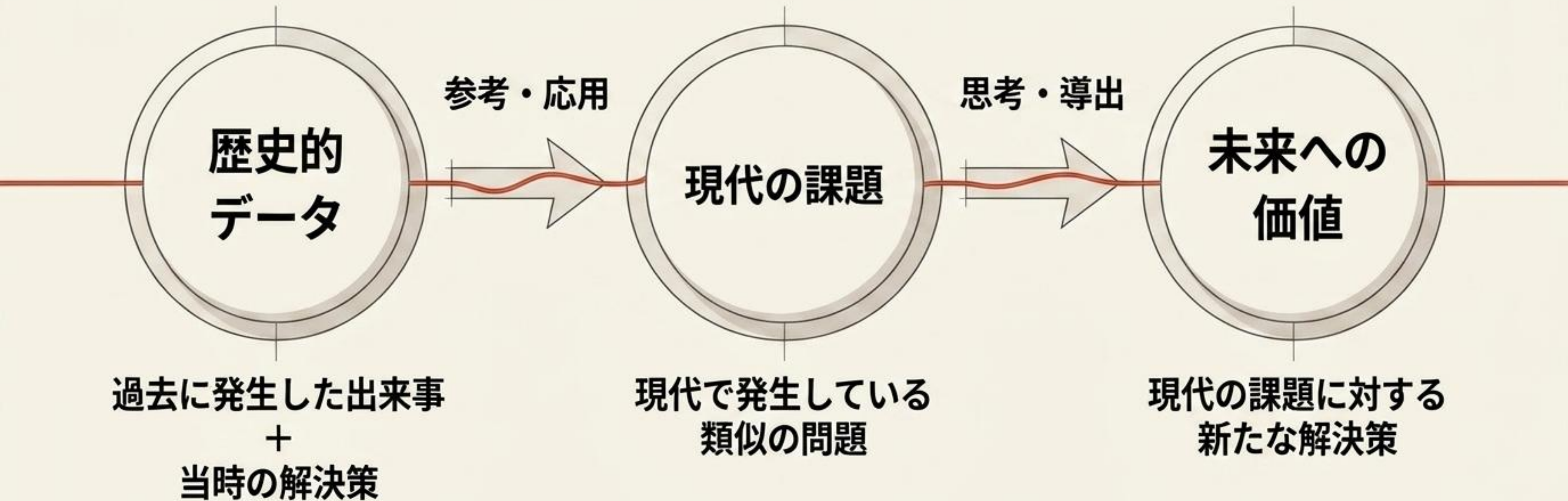
[Before] 従来の歴史教育
過去の出来事を暗記する

授業開発によるパラダイムシフト



[After] 新しい歴史教育
過去の解決策を参考に、
現代の類似問題を解決する

開発した「課題解決型」授業のエンジン



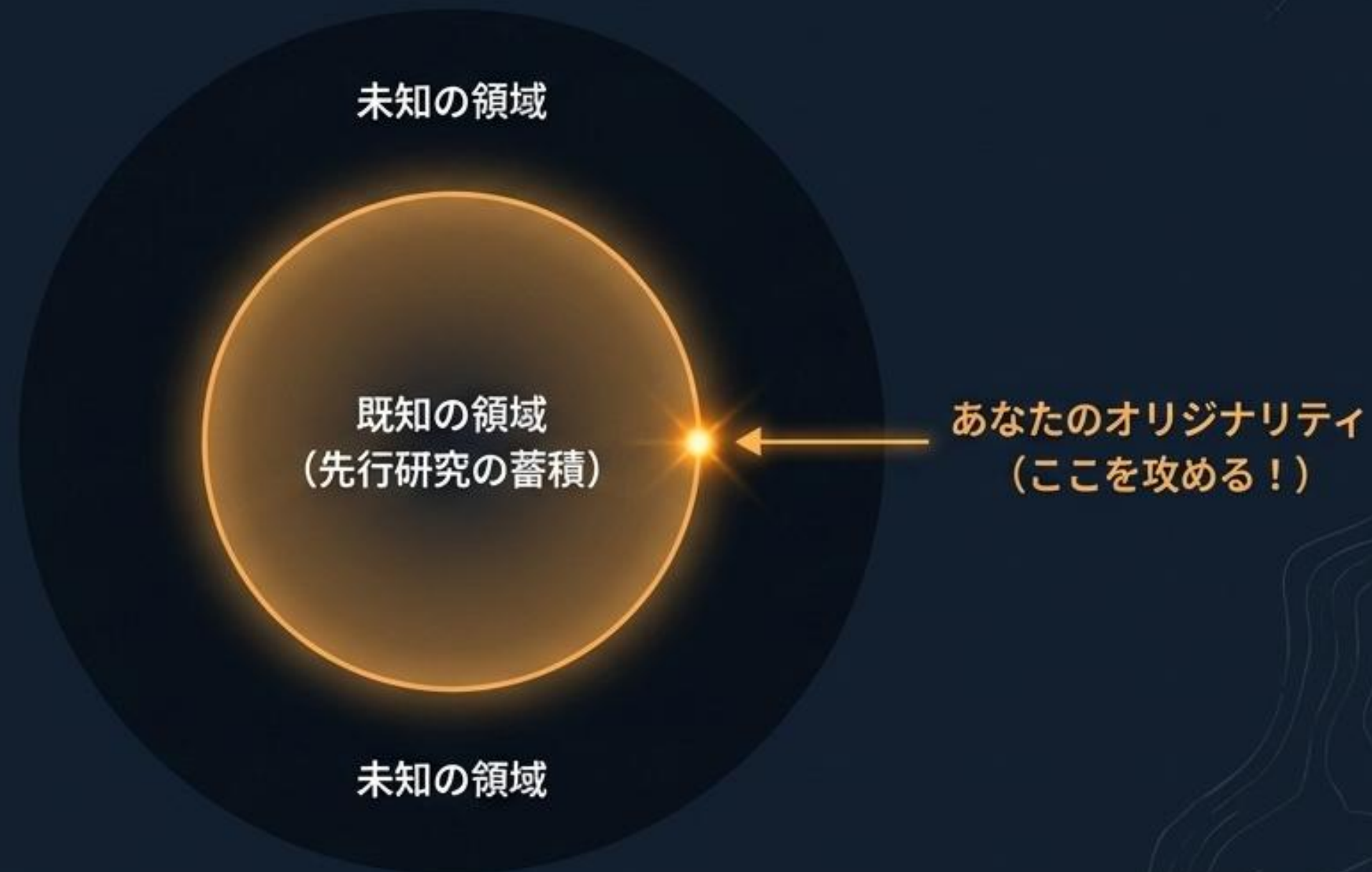
先行研究は「障害物」ではなく「地図」である



- 研究を始めると「すでに誰かがやっているのではないか？」という不安に直面します。
- 先行研究をなぞるだけでは、新しい価値（新鮮味）は生まれません。
- しかし、先人たちがどこまで到達したかを知らなければ、自分の現在地すら把握できないのです。

オリジナリティは「既知の境界線」に存在する

先行研究を徹底的に調査することで初めて、「まだ明らかになっていない空白地帯」が見えてきます。
オリジナリティは、無から生まれるのではなく、既存の知識の境界線上で生まれます。



「まだ時間はある」という最大の罠

研究の過程で直面した最大の失敗は、計画性の欠如でした。

「提出期限まではまだ余裕がある」という錯覚。
気づけば期限間際になり、あと少し遅れていたら取り返しのつかない事態になっていました。

計画と現実のギャップを可視化する

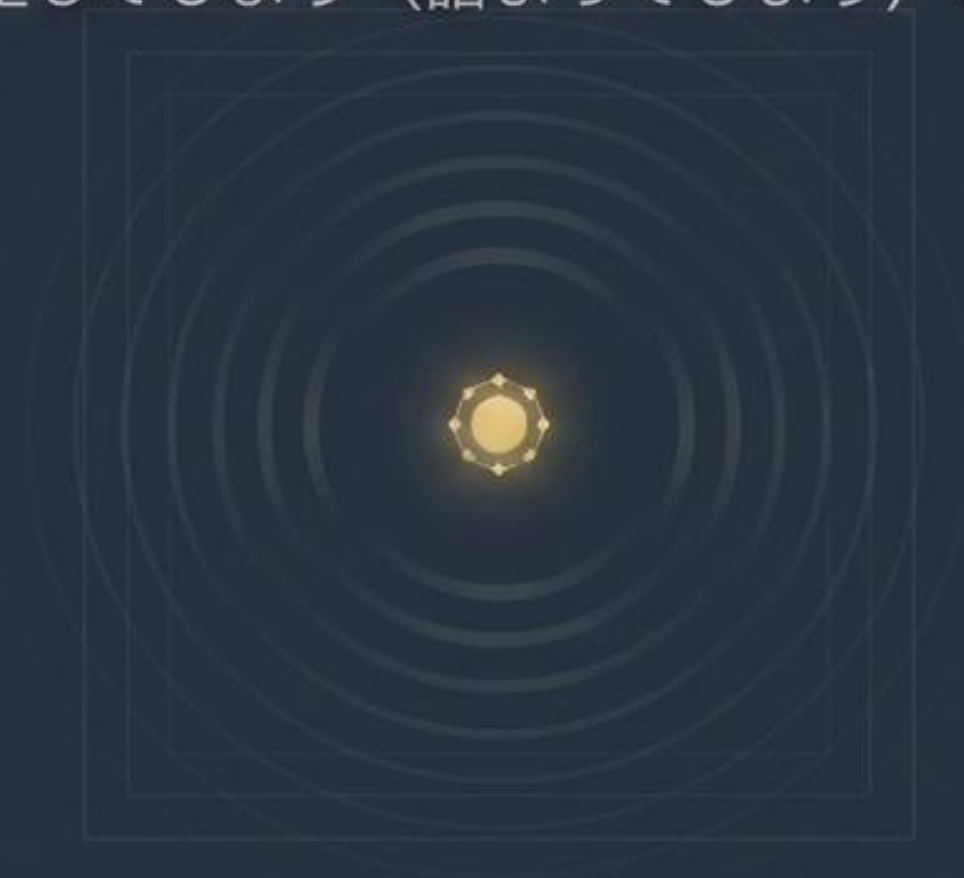
常に先を見据え、逆算して計画を立てること。

締め切り前のパニックは、思考の質を著しく低下させます。



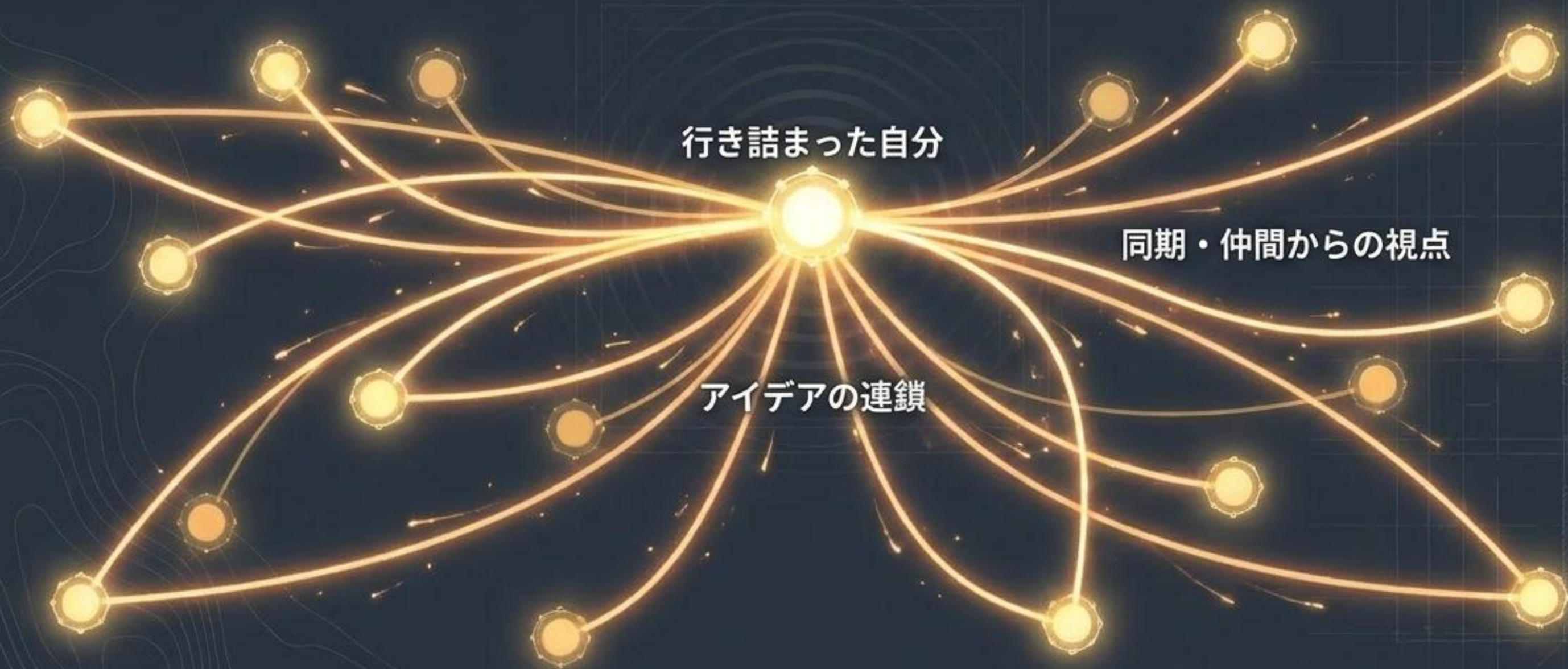
「孤高の天才」という幻想を捨てる

大学院での研究は、孤独な作業になりがちです。一人で抱え込んでいると、新しいアイデアが湧かず、思考が完全に停止してしまう（詰まってしまう）ことが多々ありました。研究は、一人きりでは限界を迎えます。



同期（仲間）との繋がりが突破口を開く

思考が停止した時、同期の存在が何よりの救いでした。自分一人で研究しているわけではないという事実が、視界を広げ、新たなアイデアをもたらしてくれます。



未知を切り拓く、3つの羅針盤

これらは独立したタスクではなく、ひとつのシステムです。地図が目的地を示し、時計が進みを進め、仲間が挫折から救ってくれます。



地図：先行研究

現在地を知るための知見

時計：計画性

確実に到達するための逆算

船員：仲間・同期

困難を突破するための協働



過去の知を繋ぎ、あなたの未来を創る

「過去を知って、未来に生かす」。これは歴史に限らず、すべての研究に通じる真理です。
先行研究という過去を敬い、計画という未来を描き、仲間と共に現在を駆け抜けてください。
あなたの「悔しさ」や「疑問」が、いつか世界を変える新しい知となることを応援しています。

